

●國民美術協會の第一回總會

國民美術協會は六月二十一日午後五時三十分、上野精養軒に於て、第一回總會を開きたるが、出席會員は八十五名、其姓名左の如し。

萩生天泉、鏑木清方、長安雅山、中倉玉翠、結城素明、島田墨仙、島内松南、鳥崎柳塙、平田松堂(以上日本畫)岩村透、石井柏亭、石川寅治、八條彌吉、橋本邦助、東城鉦太郎、太田三郎、岡田三郎助、和田英作、渡部審也、吉田博、田邊至、田崎延次郎、高村真夫、中村勝治郎、中村不折、中野營三、中澤弘光、長原孝太郎、永地秀大、久米桂一郎、黒田清輝、郡司福秀、矢崎千代二、山下新太郎、山本森之助、丸山晚霞、松井英次郎、牧野司郎、藤島武二、小糸源太郎、小山正太郎、五島健三、跡見泰、有島生馬、安藤復藏、佐藤哲三郎、佐藤均、齋藤豊作、櫻井知足、三宅克己、南薫造、清水勘一、平木政次、薄拙太郎、(以上西洋畫)石川權治、畑正吉、小倉右一郎、角取助治、吉田三郎、武石弘三郎、上田直次、藤井浩祐、朝蔭其明、朝倉文夫、北村四海、北村正信、白井保次郎、新海竹太郎、(以上彫塑)伊東忠大、中條精一郎、岡田信一郎、古宇田實(以上建築)磯矢完山、六角紫水、保坂光山、沼田一雅、岡野琴、香取秀真、河邊正夫、津田信夫、海野清、海野美盛、合田清、北達藏、島田佳矣、(以上裝飾美術)

來社團法人たる同協會に取りては法制上不可能の説なれば賛成者なく、次で吉田博氏は理事は法律上必要なれども會頭は之を廢すべく、是れ太平洋畫會の方針なり又學藝部は無用なりと唱へ、丸山晚霞氏は子も太平洋畫會々員なるも會頭の必要を認め、學藝部も設けて可なりと駁す、岩村透氏は起て、斯る性質の大團體にては是非會頭を置くの必要あり、會頭は畢竟會務を遂行する事務者にして、從來の諸團體の總裁の如き名譽の爲に設くるものと全然同じからず、理事は固より會務に當るも、斯る大團體には、會務全體を總括して、之を指導する船頭なくしては船を進行せしむること能はず、かく會頭の必要明々々々なるに拘らず、會頭無用説を唱ふる人の太平洋畫會側の人に限るは子の僻見かは知らねど、舊白馬會の黒田氏が現在の會頭なるが爲にはあらずや、或は又黒田氏に何等か野心ありて會頭となれるが如く思惟する人もあらば、それは全く誤解なりと云ふ様な事を述ぶ。中村、吉田、永地三氏のみにて消滅す。中條精一郎氏は本會の如き諸種の美術を包含する大團體に於ては白馬會又は太平洋畫會なぞと云ふが如き取るに足らざる感情上の確執を一掃すべしと喝破して、滿場の喝采を博し、中村、吉田兩氏は、かく我々の説が須ねられざる以上は席に在る能はずとて退席せり。定款改正案中原案を修正したる主なる事項は、會員資格を文展又は其以上と認むる展覽會及博覽會の出品者云々とするを削除し従來繪畫部中に包含せられたる、日本畫、西洋畫を二部に分つ事とし、學藝部を設置するも、音樂部の設置は時機尚早の故を以て削除し、會頭、主事、

主計を理事の互選とする事等なりき。續いて各部評議員の選挙を行ひしが、開票の結果は

(日本書部)島田墨仙、中倉玉翠、荻生天泉、鏑木清方、長安雅山、結城素明、島内松南、島崎柳塙、平田松堂、山村耕花

(西洋書部)藤島武二、和田英作、岡田三郎助、久米桂一郎、黒田清輝、岩村透、石井柏亭、中澤弘光、小山正太郎、長原孝太郎、松岡壽、森林太郎、山下新太郎、中川八郎、永地秀太

(彫塑部)朝倉文夫、武石弘三郎、新海竹太郎、畑正吉、石川健治、小倉石一郎、藤井浩祐、白井保次郎

(建築部)中條精一郎、塚本靖、大澤三之助、佐藤功一、武田五一、岡田信一郎、田邊淳吉

(裝飾美術部)板谷波山、津田信夫、和田英作、香取秀真、合田清、結城素明、海野美盛、沼田一雅、河邊正夫、六角紫水、菅原直之助、杉浦非水、小川三知、島田佳矣、保坂光山

次いで各部評議員は互選を以て左の理事を選挙したり。

(日本書部)島田墨仙、(關西部)一名は未決定、(西洋書部)和田英作、(彫塑部)新海竹太郎、(建築部)中條精一郎、(裝飾美術部)津田信夫

次に裝飾美術部を文展に新設する事を文部省、建設する件を議決し、文展審査員豫選の件は時期未だ熟せざるを以て今回は之を見合はすことに決し

午後十一時卅五分閉會せり。

因に同會現在の會員數は二百三十名にして、其内譯は日本書部三十三名、西洋書部二十四名、彫塑部三十一名、建築部十八名、裝飾美術部二十九名なり。

●同會理事會

同會改選後の第一回理事會は、其翌日山下町同會事務所にて開かれたるが、關西に於ける日本書部理事一名未決定なるを以て、

假令頭に中條氏を、假主事に和田氏を、假主計に新海、津田兩氏を互選したり、追て關西に於ける日本書部一名選擇滞り、新に五選の上確定する者なり。因に右關西日本書部理事選舉等の用向を帯び、和田理事は二十四日迄出發、京阪に向へり。又同會主催のロダン氏作品展覽會は明年四月、大正博覽會と同時に博物館内に於て開くことなれり。

●太平洋畫會慰勞會

前記國民美術協會總會に於て紛擾を惹起したる中村不折、吉田博二氏の去就に關し、太平洋畫會理事諸氏は同會展覽會慰勞會を兼ねて二十三日夜湯島魚十に會合して協議する所あり、中村、吉田兩氏の説は、要するに其主張を太平洋畫會に結び付けんとの考らしきも國民美術協會と太平洋畫會とは全く別ものなれば右兩氏に於て反響なりとも太平洋畫會が全部を運んで行動を一にする必要もなければ、各自隨意の行動を取る事に相談一決したるよし、緒島中村、吉田兩氏は退會するならん。

新刊紹介

●奈良と平泉 黒田鵬心君著

現代文藝叢書第二十五編) 東京春陽堂發行

其内容は古美術旅行記と古美術分布觀との二部に分つてある。前者は「河内の觀心寺」「奈良の三日」「平泉の七日」「白水仙院堂」「醍醐から奈良へ」(を含む)、後者は「總説」「奈良」「京都」「東北」「鎌倉」に分けてある。平明なる文章で、簡潔に説明を試みたるもので古美術史に關しては好案内書である。固より著者の最も得意とする建築に關して最も詳細に記述してあるが、建築に關する趣味の幼稚な我邦では殊に重寶である。(定價二十五錢)

●耳の趣味 鈴木誠村君著

東京 左久夏書房發行(定價六十五錢)

「耳の趣味」とは面白い詞だ、そして能く此書の性質を現はして居る、凡そ音として、聲として、著者の此書に述べる如き趣味を以て之を聞かば、常に興の饒いことである。耳あるものにして此趣味を持たぬは、殆ど聖に等しく、色盲の色の趣味を感ぜざるが如きものだ。人生の價値も大に減殺せられる譯だ。著者が、日常平凡と思はれる音や響にまで、斯る趣味を發見し、之を宣傳することば驚かすべきことである。特に文章輕快能く景象や情趣の印象を鮮かに讀者の腦裡に感應せしめて、興味が盡きない。「木魚の音」「養打」「馬追ひ唄」其他擧げれば限りもないが、著者が單に耳の趣味ばかりでなく、あらゆる趣味を持つて居るときこそが、讀者を惹き附ける所以であらう。(廣)

▲寄贈書目▼廣陵美術會第八回展覽會記念集及繪葉書○大阪士筆會第一回展覽會作品集